

青年期における独立意識に関する研究(I)

今 林 俊 一*・島 田 俊 秀*

(1989年10月16日 受理)

A Study on the Awareness of Independence in Adolescents (I)

Shunichi IMABAYASHI・Toshihide SHIMADA

1. 問題と目的

青年期は、生物学的、心理学的、社会学的な意味において、子どもから大人への移行の時期である。生物学的には、身体各部が急激に変化し、発達の認められる時期であり、特に、第二性徴によって、青年個々人は性を直接意識するようになる。しかしながら、人間の場合には、こうした生物学的プログラムに基づく身体的変化やその他の要因等により付随的にさまざまな心理・社会的問題を喚起させる。そして、その課題の解決にあたって、青年個々人は、彼らを取り巻く社会や文化の影響を大きく受けながら、自我の大きな変革を迫られる体験をすることになる。すなわち、彼らは、自分自身の内部変化に関心を向け、自分という存在を他からはっきり区別して意識するようになる体験を通して、新たな自分を確立していかなければならないのである。

このような自我の発見による自己意識の発達によって、自分や他者に対する認識を変え、両親の保護や干渉から離脱して、自己の判断と責任において行動しようとする傾向が強められることになる。このことは、青年期の発達課題のひとつである対人関係の変化として理解されており、具体的には、親からの心理的な独立、親への反抗、仲間志向などとして研究されている。

独立性の発達は、人格全般の発達に関連する総合的な概念であるため、客観的・数量的に分析検討することは困難である。これまで、鈴木(1936)⁽⁶⁾、久世(1958)⁽⁴⁾、加藤(1977)⁽²⁾などが独立意識の発達過程の研究を行っているが、実証的な研究は、まだ、多いとはいえない。すなわち、加藤ら(1980)⁽³⁾の指摘にもあるように、従来の研究方法では独立意識を構成する内容の分析が十分になされてきているとはいえないのである。

加藤ら(1980)⁽³⁾は、青年の独立意識の構成内容を分析し、それに基づく測定尺度の開発を試みている。彼らの因子分析的研究から、「自己の独立性」「親への依存性」「独立への移行や独立の芽

* 鹿児島大学教育学部心理学科

生えに関係した反抗や内的混乱」に関連した3因子20項目が抽出されている。彼らは、開発した測定尺度によって、独立意識の発達的変容・性差について検討を行っている。その結果、全体的な傾向として、中学生からすでに自己の独立性は高いこと、反抗や内的混乱の意識は少ないこと、高校・大学と進むにつれて反抗・内的混乱の意識はさらに低下すること、女子においては、親への依存意識がむしろ強まることなどが示された。また、尺度Ⅰの「独立性」と尺度Ⅱの「親への依存性」との間には、高い負の相関関係が示されなかったことから、独立性と依存性は必ずしも両極概念ではないことも明らかにしている。この点については、依存性概念の再検討を試みた高橋(1968 a⁽⁷⁾, b⁽⁸⁾, 1970⁽⁹⁾ など)によって、人間の発達過程における一側面としての依存から自立への変化の過程は、必ずしも前者の否定・消滅を意味するものではなく、依存性の発達変容過程が自立性の発達変容の過程であり、依存対象の拡大と十分な「依存構造」の形成の過程こそ、相対的に柔軟な自立性が獲得されていく過程であると指摘されている。

本研究では、前述のような加藤らの研究成果を踏まえ、「現代青年は実際生活の面ではきわめて依存的であることが一般に指摘されているにもかかわらず、意識の上では独立性が高いのが特徴といえる」という指摘について、青年の依存対象への依存度ならびに「自分」の相対的な位置づけという観点から青年期の独立意識と依存性との関係を検討することを通して考察しようとするものである。

具体的には、主に、以下の4つの点について検討する。

- 1) 依存対象として「自分」の順位が相対的に高い位置を占めている者は、自己の判断と責任において行動しようとする傾向が強まるために、加藤らの尺度Ⅰの「独立性」の意識が比較的高くなるであろう。
- 2) 依存対象として「父」「母」の順位が相対的に高い位置を占めている者は、困難に直面したり、選択・判断に戸惑ったりする際に、両親や教師からの心理的情緒的な支持を優先しようとする傾向が強まるために、尺度Ⅱの「親への依存性」の意識が比較的高くなるであろう。
- 3) 依存対象として「(同性の)友人」の順位が相対的に高い位置を占めている者は、親からの心理的分離を背景として生じてきている孤独感や抑うつ感を比較的強く感じているために、尺度Ⅰの「独立性」の意識は、依存対象が「自分」の者より相対的に低く、尺度Ⅱの「親への依存性」の意識は、依存対象が「父」「母」の者よりも相対的に低くなるであろう。
- 4) 依存対象の相対的位置づけが青年の独立意識と関わるとすれば、それは、依存対象を求める際の観点において何らかの差異をもたらすであろう。

2. 方 法

2.1. 調査対象

鹿児島市立A中学校2年生, 129名(男子69名, 女子60名), 鹿児島県立B高等学校(普通科)

2年生、126名（男子63名、女子63名）、鹿児島県内の国立C大学学生、124名（男子64名、女子60名）の計379名（男子196名、女子183名）。

2.2. 調査期日

1988年10月20日～11月17日。

2.3. 調査場所

全ての調査は、生徒の所属する各教室内、および心理学を受講している学生の講義室内で実施した。

2.4. 調査材料

2.4.1. 独立意識の質問紙

加藤ら（1980）⁽³⁾が作成した青年の独立意識の測定尺度を使用した（巻末の資料1、参照）。この測定尺度は3尺度20項目からなり、尺度Ⅰは「独立性」の尺度（10項目）、尺度Ⅱは「親への依存性」の尺度（5項目）、尺度Ⅲは「反抗・内的混乱」の尺度（5項目）から構成されている。

2.4.2. 依存性の意識の質問紙

加藤（1977）⁽²⁾が作成した自己の独立性、依存性の意識を明らかにするための質問紙を使用した（巻末の資料1、参照）。この質問紙は、父・母・きょうだい・親類の人・先生・同性の友人・異性の友人・上級生や先輩・自分・神仏の10対象を以下のような3つの観点のもとで順位づけするように構成されている。

- (1) 共にいるとき心の落ち着く相手
- (2) 困ったとき意見を重んずる相手
- (3) これからの人生で心の支えになる相手

2.5. 手続き

独立意識の測定尺度は、学級担任・講義担当者の監督の下で一斉に実施した。測定尺度への回答は、各項目に対して、「全く自分にあてはまる」「大体自分にあてはまる」「どちらともいえない」「あまり自分にあてはまらない」「全く自分にあてはまらない」の5件法で評定させた。

依存対象を明らかにする質問紙は、「あなたは、ふだん誰といっしょにいるとき、心が落ち着きますか。次の相手について、最も落ち着くものから順に、1, 2, 3, …… , 10の順位をつけて下さい」というように教示し、10の対象を示し、前述の3つの観点ごとに1位から10位までの順位づけをさせた。

2.6. 処理

独立意識の測定尺度では、各項目ごとの回答に対して、質問内容を肯定している選択肢の方から5点、4点、3点、2点、1点の得点を与え、各測定尺度ごとに総点を算出した。

依存対象を明らかにする質問紙は、各対象の平均順位を算出した。厳密に言えば、各順位間の差異は一定とは限らないので、平均を算出して比較することには無理があるが、大体の傾向を知る方法としては適切であると思われる。さらに、各対象別に順位の数と割合を算出した。以上の平均

順位と対象別の順位の割合から、依存対象についての傾向を明らかにする。

なお、統計処理には、鹿児島大学情報処理センターの SAS 統計処理パッケージを用いた。

3. 結 果

3.1. 独立意識の発達傾向と性差に関する分析

表1は、独立意識の各尺度ごとの平均得点を発達(校種)別と性別に示したものである。

尺度Iの「独立性」において、まず、発達傾向としては、男女ともに主効果が認められた(男子:F=22.74, $df=2/193$, $p<0.001$; 女子:F=3.81, $df=2/177$, $p<0.05$)。さらに、それぞれライヤン法による平均対の比較を行った結果、男子では、中学生<高校生, 中学生<大学生, 高校生<大学生間に有意差(5%水準)が認められた。女子では、中学生<大学生間に傾向(10%水準)が認められた。次に、性差では、大学生において、女子に比べて男子の方の「独立性」の得点が高いという結果が認められた($t=4.49$, $df=122$, $p<0.001$)。

尺度IIの「親への依存性」において、発達傾向としては、男子のみに主効果が認められた(F=8.92, $df=2/193$, $p<0.001$)。さらに、ライヤン法による平均対の比較を行った結果、中学生>高校生, 中学生>大学生間に有意差(5%水準)が認められた。性差では、大学生において、男子に比べて女子の方の「親への依存性」の得点が高いという結果が認められた($t=2.97$, $df=122$, $p<0.01$)。

尺度IIIの「反抗・内的混乱」において、発達傾向としては、男女ともに主効果が認められた(男子:F=6.74, $df=2/191$, $p<0.01$; 女子:F=12.79, $df=2/180$, $p<0.001$)。さらに、それぞれライヤン法による平均対の比較を行った結果、男女とも、中学生>大学生, 高校生>大学生間に有意差(5%水準)が認められた。また、性差は、認められなかった。

3.2. 各対象への依存度に関する分析

表2-1~表2-3は、依存性の対象について、3つの観点における平均順位を算出したものである。なお、各依存対象の順位別の人数と割合は、

表1 独立意識尺度の尺度別得点*

性別	尺度		中 学	高 校	大 学
男	I**	N	69	63	64
		M	32.14	34.21	38.05
		SD	4.27	6.32	4.43
子	II	N	69	63	64
		M	16.54	14.52	13.70
		SD	3.64	4.71	3.50
女	III	N	68	63	63
		M	14.25	13.70	12.13
		SD	3.53	3.68	2.86
子	I	N	57	63	60
		M	31.58	32.25	34.23
		SD	5.20	5.91	4.97
子	II	N	60	63	60
		M	16.47	15.08	15.67
		SD	4.09	5.05	3.83
子	III	N	60	63	60
		M	14.25	14.11	11.63
		SD	3.14	3.17	3.22

*尺度Iの最高可能得点は50, 最低可能得点は10, 中間得点は30, 尺度II, IIIの最高可能得点は25, 最低可能得点は5, 中間得点は15。

**尺度Iは「独立性」, 尺度IIは「親への依存性」, 尺度IIIは「反抗・内的混乱」。

表2-1 「共にいるとき心の落ち着く相手」の平均順位と平均順位による順位づけ

		自分	父	母	きょうだい	親類	先生	同性の友人	異性の友人	上級生先輩	神(仏)
中学	M	3.99	3.76	2.92	4.31	6.27	7.61	3.21	7.52	7.44	7.10
	SD	2.86	2.18	1.79	1.90	1.80	1.96	2.04	2.15	2.05	2.65
		4	3	1	5	6	10	2	9	8	7
高校	M	3.21	4.85	3.51	4.02	7.22	7.89	2.45	5.76	6.28	7.79
	SD	2.36	2.04	1.97	1.80	1.54	1.64	1.59	2.53	1.99	2.55
		2	5	3	4	8	10	1	6	7	9
大学	M	3.08	4.40	3.40	4.05	7.43	7.88	2.63	5.17	5.98	9.17
	SD	2.45	1.72	1.75	1.89	1.51	1.53	1.57	2.20	2.11	1.69
		2	5	3	4	8	9	1	6	7	10

巻末の資料に示す（資料2，参照）。これらより以下のような傾向が明らかにされた。

3.2.1. 「共にいるとき心の落ち着く相手」（以下，問1）（表2-1，参照）

中学，高校，大学を通して，「同性の友人」「母」「自分」「きょうだい」「父」は上位を占め，「先生」「神（仏）」「親類」「上級生・先輩」「異性の友人」は下位を占めている。特に，「同性の友人」「自分」「母」の位置は高く，逆に，「先生」「神（仏）」の位置は低い。

発達傾向は，中学生に比べ高校・大学生になると，「自分」「同性の友人」「異性の友人」の順位が上昇傾向を示すのに対して，「母」「父」「親類」「神（仏）」の順位は下降傾向を示している。すなわち，発達傾向としては，父母への依存から自分や友人への依存に移行することが認められた。

「父」と「母」を比較すると，各校種とも「母」の順位が高い。父よりも母と共にいるときの方が，心理的情緒的により安定感を得ていることが推測される。

「きょうだい」の順位は，ほぼ4位程度の位置を占めている。

「同性の友人」の順位からは，高校・大学生になるに従い，「母」や「自分」と比べても，相対的に順位が高く，心理的情緒的結合による安定感を得ていることが確かめられた。

「異性の友人」の順位は，高校・大学生になると，上昇傾向を示しているが，大学生においても，平均順位では5位以下の位置に留まっている。

発達の的には，「自分」の順位に上昇傾向が認められているが，この「自分」への依存は，自己の独立意識の一つの指標と考えられる。そこで，「自分」に対する反応について1位から10位までの度数分布から，中学・高校・大学間の差の検討を行った結果，傾向が認められた（ $x^2=28.81$ ， $df=18$ ， $p<0.10$ ）。

3.2.2. 「困ったとき意見を重んずる相手」（以下，問2）（表2-2，参照）

一般的には，問1と同様の傾向が認められ，中学・高校・大学を通して，「同性の友人」「母」「自分」「父」「きょうだい」が上位を占め，「神（仏）」「親類」「異性の友人」「先生」「上級生・先

表2-2 「困ったとき意見を重んずる相手」の平均順位と平均順位による順位づけ

		自分	父	母	きょう だい	親類	先生	同性の 友人	異性の 友人	上級生 先輩	神 (仏)
中学	M	4.79	3.65	3.11	5.04	6.70	6.11	3.35	7.48	6.93	7.10
	SD	3.18	2.34	1.84	2.07	1.94	2.50	2.20	2.93	2.25	2.82
		4	3	1	5	7	6	2	10	8	9
高校	M	3.49	4.07	3.36	5.36	7.83	6.12	2.78	6.07	5.80	7.80
	SD	2.62	2.26	1.87	2.02	1.51	2.31	1.89	2.36	2.11	2.64
		3	4	2	5	10	8	1	7	6	9
大学	M	3.15	3.52	3.67	5.38	7.93	5.88	3.12	5.69	5.19	9.29
	SD	2.15	1.95	2.04	2.35	1.47	2.05	1.80	2.16	2.23	1.59
		2	3	4	6	9	8	1	7	5	10

輩」が下位を占めている。しかし、問1に比べて、「父」「上級生・先輩」「先生」の順位の上昇が注目される。すなわち、困った問題が生じた場合には、父や教師、上級生・先輩に対して相対的に期待・信頼を寄せる傾向が高まることを示している。

発達傾向は、高校・大学生になると、「自分」「異性の友人」「上級生・先輩」の順位が上昇傾向を示し、「母」「親類」「先生」の順位は下降傾向を示している。すなわち、発達傾向としては、問1と同様に、父母への依存から離れ、自己の選択・判断（友人の判断なども）を尊重しようとする方向に移行することが認められた。また、「自分」に対する反応について、問1と同様な方法で検討した結果、中学・高校・大学間に有意な差が認められた ($x^2=34.34$, $df=18$, $p<0.05$)。

なお、問1と問2における「自分」に対する反応について検討した結果、中学、高校、大学ともに統計的に有意な差は認められなかった。

「父」と「母」を比較すると、「父」の順位が上昇し、特に、大学では「母」の位置を上回る傾向が認められる。

「同性の友人」の順位は、問1の場合と同様の結果が示されている。すなわち、青年にとって、友人は、情緒的安定を与えてくれる存在だけでなく、困った時・判断に迷った時などに適切な指示や判断材料（情報）の提供者、相談相手としての実際的な側面での存在としても重要な依存対象となっていると思われる。

3.2.3. 「これからの人生で心の支えになる相手」（以下、問3）（表2-3、参照）

全般的には、問1・問2と同様な傾向が示されているが、「自分」の順位は下降傾向、「父」「母」「異性の友人」の順位の上昇傾向などが問3の場合の特徴として指摘できる。すなわち、今後の人生の心の支えになる対象として、父母や異性の友人の重要性が相対的に高まっているといえよう。

発達傾向は、問1・問2とは異なり、父母への依存から離脱して自立している傾向が明確に示されていない。すなわち、中学、高校、大学とも「同性の友人」「母」「父」の順位が「自分」の順位

表2-3 「これからの人生で心の支えになる相手」の平均順位と平均順位による順位づけ

		自分	父	母	きょうだい	親類	先生	同性の友人	異性の友人	上級生先輩	神(仏)
中学	M	4.63	3.45	3.03	4.68	6.56	7.33	3.67	6.80	7.40	6.71
	SD	3.14	2.25	1.95	2.02	2.00	2.18	2.04	2.72	2.08	2.70
		4	2	1	5	6	9	3	8	10	7
高校	M	4.47	3.89	3.10	4.63	7.49	7.51	3.04	4.55	6.43	7.58
	SD	2.91	1.21	1.82	1.91	1.61	1.79	2.10	2.66	1.91	2.78
		4	3	2	6	8	9	1	5	7	10
大学	M	3.79	3.72	3.45	4.80	7.79	6.79	2.85	4.20	5.97	9.08
	SD	2.81	1.74	1.87	2.04	1.56	1.93	1.93	2.28	2.22	1.76
		4	3	2	6	9	8	1	5	7	10

より高く、自己の選択・判断を尊重しようとする方向は必ずしも認められなかった。また、問1・問2と同様の方法で「自分」に対する反応を検討した結果、これまでと異なり、有意差は認められなかった ($x^2=20.83$, $df=18$, $p>0.05$)。

なお、「自分」に対する反応について、問1と問3、問2と問3の間で検討した結果、問1と問3に関し、高校生において有意差が認められた ($x^2=19.08$, $df=9$, $p<0.05$)。これらのことから、「人生の心の支え」としては「自分」の位置は相対的に低下することを示している。

3.2.4. 各依存対象の1位にランクされた割合

依存対象として1位を占めるものは、青年の心理的な世界において、相対的に、大きな影響力を持つものと思われる。表3-1～表3-3は、各依存対象ごとに1位を占める割合を示したものである。これらより、以下のことが明らかにされた。

3つの観点の質問を問わず、「自分」「同性の友人」の1位の割合が高くなっている。平均順位における結果よりも、青年の自立・独立への意識や両親に比べて同輩の友人との関わりへの影響力などが明確に示されている。

また、「親類」「先生」「上級生・先輩」は、どの質問でも、1位の割合が顕著に低くなっている。平均順位の結果とあわせてみると、青年の人間関係は、仲間集団・親友や両親以外においては、希

表3-1 「共にいるとき心の落ち着く相手」～1位の割合 (%)

	自分	父	母	きょうだい	親類	先生	同性の友人	異性の友人	上級生先輩	神(仏)
中学	31.75	11.11	19.84	3.20	0.00	0.79	27.78	1.59	0.79	3.20
高校	37.70	1.64	13.11	4.92	0.00	0.00	37.70	3.28	0.00	1.64
大学	43.09	2.44	13.01	4.88	0.00	0.00	30.89	3.25	1.63	0.81

表3-2 「困ったとき意見を重んずる相手」～1位の割合 (%)

	自分	父	母	きょうだい	親類	先生	同性の友人	異性の友人	上級生先輩	神(仏)
中学	25.20	17.32	14.96	3.15	0.00	3.15	26.77	0.00	2.36	7.09
高校	33.33	9.76	17.89	0.81	0.00	1.63	31.71	0.81	1.63	2.44
大学	39.02	13.82	12.20	3.25	0.00	2.44	24.39	2.44	2.44	0.00

表3-3 「これからの人生で心の支えになる相手」～1位の割合 (%)

	自分	父	母	きょうだい	親類	先生	同性の友人	異性の友人	上級生先輩	神(仏)
中学	26.40	19.20	15.20	3.20	1.60	0.80	20.00	7.20	0.80	5.60
高校	22.94	9.17	27.52	1.83	0.00	0.00	22.94	11.93	0.92	2.75
大学	30.65	4.84	12.90	3.23	0.00	0.81	35.48	9.68	1.61	0.81

薄になっていることが推測される。

「父」は、問1に比べると問2や問3において、1位の割合が増加しており、また、「異性の友人」では、全般的に割合は低いが、問3において、1位の割合は増加の傾向を示している。

3.3. 独立意識と依存性に関する分析

独立意識と依存性の関係を分析するために、各依存対象の中から、平均順位が上位にあり、1位の占める割合の多い依存対象として、「自分」「父」「母」(以下、「父」「母」をあわせて「両親」とする)「同性の友人」を選び出した。そして、この3対象を1位に選んだものの独立意識の測定尺度の得点を校種別に求め比較した。

3.3.1. 「独立性」尺度と依存性の関係

表4-1-1～表4-1-3は、依存対象として、「自分」「両親」「同性の友人」を1位に選んだものの尺度Iの「独立性」の平均得点を校種別に示したものである。その結果、問1の場合、発達傾向で、「自分」「両親」「同性の友人」に主効果が認められた(「自分」: $F=3.34$, $df=2/135$, $p<0.05$; 「両親」: $F=9.51$, $df=2/72$, $p<0.001$; 「同性の友人」: $F=9.95$, $df=2/115$, $p<0.001$)。さらに、それぞれライヤン法による平均対の比較を行った結果、「自分」では、高校生<大学生間に傾向が認められ、「両親」と「同性の友人」では、中学生<大学生、高校生<大学生間に有意差(1%水準)が認められた。また、依存対象別では、主効果は、認められなかった。

問2では、依存対象別で、中学生と高校生に主効果が認められた(中学生: $F=3.50$, $df=2/101$, $p<0.05$; 高校生: $F=5.60$, $df=2/109$, $p<0.01$)。さらに、ライヤン法による平均対の比較を行った結果、中学生において、「自分」>「同性の友人」間に傾向が認められ、高校生において、「自分」>「両親」間に有意差(5%水準)と「自分」>「同性の友人」間に傾向が認められた。

表4-1-1 「共にいるとき心の落ち着く相手」の対象別の「独立性」尺度得点

		自分	両親 (父母)	同性の 友人
中学	N	39	39	34
	M	33.26	31.62	31.29
	SD	4.88	3.06	4.72
高校	N	46	17	46
	M	33.39	31.53	32.46
	SD	5.96	53.66	5.29
大学	N	53	19	38
	M	35.75	36.95	36.34
	SD	4.97	5.77	5.03

表4-1-2 「困ったとき意見を重んずる相手」の対象別の「独立性」尺度得点

		自分	両親 (父母)	同性の 友人
中学	N	30	41	33
	M	33.97	31.66	31.12
	SD	4.97	3.73	4.83
高校	N	40	33	39
	M	35.15	31.06	32.33
	SD	5.48	4.90	5.51
大学	N	48	32	30
	M	36.75	34.75	36.07
	SD	4.32	5.72	5.56

表4-1-3 「これからの人生で心の支えになる相手」の対象別の「独立性」尺度得点

		自分	両親 (父母)	同性の 友人
中学	N	33	42	24
	M	32.73	31.31	30.25
	SD	3.84	3.97	4.10
高校	N	24	39	39
	M	34.50	30.72	33.49
	SD	6.12	5.24	5.36
大学	N	38	22	44
	M	35.66	35.82	36.18
	SD	4.32	5.75	5.36

また、発達傾向では、「自分」に傾向が、「両親」と「同性の友人」に主効果が認められた（「自分」： $F=3.04$, $df=2/115$, $p<0.10$ ；「両親」： $F=5.52$, $df=2/103$, $p<0.01$ ；「同性の友人」： $F=7.16$, $df=2/99$, $p<0.01$ ）。さらに、ライヤン法による平均対の比較を行った結果、「両親」と「同性の友人」において、中学生<大学生、高校生<大学生間に有意差（5%水準）が認められた。

問3では、依存対象別で、中学生に傾向が、高校生に主効果が認められた（中学生： $F=2.75$,

$df=2/96$, $p<0.10$ ；高校生： $F=4.08$, $df=2/99$, $p<0.05$ ）。さらに、ライヤン法による平均対の比較を行った結果、高校生において、「自分」>「両親」, 「同性の友人」>「両親」間に傾向が認められた。また、発達傾向では、「自分」「両親」「同性の友人」に主効果が認められた（「自分」： $F=3.35$, $df=2/92$, $p<0.05$ ；「両親」： $F=8.22$, $df=2/100$, $p<0.01$ ；「同性の友人」： $F=10.35$, $df=2/104$, $p<0.001$ ）。さらに、ライヤン法による平均対の比較を行った結果、「自分」では、中学生<大学生間に傾向が認められ、「両親」では、中学生<大学生、高校生<大学生間に有意差（1%水準）が認められ、「同性の友人」では、中学生<大学生間に有意差（0.1%水準）と中学生<高校生、高校生<大学生間に傾向が認められた。

3.3.2. 「親への依存性」尺度と依存性の関係

表4-2-1～表4-2-3は、依存対象として、「自分」「両親」「同性の友人」を1位に選んだものの尺度IIの「親への依存性」の平均得点を校種別に示したものである。その結果、問1の場

合、依存対象別で、中学生、高校生、大学生において主効果が認められた（中学生： $F=5.95$, $df=2/111$, $p<0.01$ ；高校生： $F=8.75$, $df=2/106$, $p<0.01$ ；大学生： $F=12.03$, $df=2/107$, $p<0.001$ ）。さらに、ライヤン法による平均対の比較を行った結果、中学生では、「自分」<「両親」間、高校生と大学生では、ともに、「自分」<「両親」, 「同性の友人」<「両親」間に有意差（1%水準）が認められた。また、発達傾向では、「同性の友人」に主効果が認められた（ $F=5.96$, $df=2/116$, $p<0.01$ ）。さらに、ライヤン法による平均対の比較を行った結果、中学生>高校生, 中学生>大学生間に有意差（5%水準）が認められた。

問2では、依存対象別で、中学生、高校生、大学生において主効果が認められた（中学生： $F=6.29$, $df=2/103$, $p<0.01$ ；高校生： $F=12.76$, $df=2/109$, $p<0.001$ ；大学生： $F=9.31$, $df=2/107$, $p<0.001$ ）。さらに、ライヤン法による平均対の比較を行った結果、中学生、高校生、大学生それぞれにおいて、「自分」<「両親」, 「同性の友人」<「両親」間に有意差（5%水準）が

表4-2-1 「共にいるとき心の落ち着く相手」の
対象別の「親への依存性」尺度得点

		自分	両親 (父母)	同性の 友人
中学	N	40	39	35
	M	15.15	18.08	16.74
	SD	4.26	2.92	3.88
高校	N	46	17	46
	M	14.02	18.94	14.24
	SD	4.48	3.42	4.41
大学	N	53	19	38
	M	14.53	18.26	13.53
	SD	3.41	2.16	3.96

認められた。また、発達傾向では、「自分」に主効果が認められた（ $F=4.28$, $df=2/116$, $p<0.05$ ）。さらに、ライヤン法による平均対の比較を行った結果、中学生>高校生間に有意差（5%水準）が認められた。

問3では、依存対象別で、中学生、高校生、大学生において主効果が認められた（中学生： $F=5.97$, $df=2/98$, $p<0.01$ ；高校生： $F=16.79$, $df=2/99$, $p<0.001$ ；大学生： $F=13.49$, $df=2/101$, $p<0.001$ ）。さらに、ライヤン法による平均対の比較を行った結果、中学生では、

表4-2-2 「困ったとき意見を重んずる相手」の
対象別の「親への依存性」尺度得点

		自分	両親 (父母)	同性の 友人
中学	N	31	41	34
	M	15.52	18.17	15.38
	SD	4.22	2.58	4.55
高校	N	40	33	39
	M	12.80	17.67	13.79
	SD	4.06	3.61	4.81
大学	N	48	32	30
	M	14.02	17.06	13.60
	SD	3.35	2.76	4.37

表4-2-3 「これからの人生で心の支えになる
相手」の対象別の「親への依存性」
尺度得点

		自分	両親 (父母)	同性の 友人
中学	N	33	43	25
	M	16.70	18.28	15.40
	SD	3.39	2.70	4.16
高校	N	24	39	39
	M	12.46	17.77	13.77
	SD	3.82	3.57	4.13
大学	N	38	22	44
	M	14.68	17.82	13.18
	SD	3.28	2.28	3.87

「同性の友人」<「両親」間、高校生と大学生ではともに、「自分」<「両親」、「同性の友人」<「両親」間に有意差（1%水準）が認められた。また、発達傾向では、「自分」に主効果が、「同性の友人」に傾向が認められた（「自分」： $F=10.15$, $df=2/92$, $p<0.001$ ；「同性の友人」： $F=2.38$, $df=2/105$, $p<0.10$ ）。さらに、ライヤン法による平均対の比較を行った結果、「自分」で、中学生>高校生、高校生<大学生間に有意差（5%水準）が、中学生>大学生間に傾向が認められた。

3.3.3. 「反抗・内的混乱」尺度と依存性の関係

表4-3-1~表4-3-3は、依存対象として、「自分」「両親」「同性の友人」を1位に選んだものの尺度IIIの「反抗・内的混乱」の平均得点を校種別に示したものである。その結果、問1の場合、依存対象別で、大学生においてのみ主効果が認められた（ $F=6.66$, $df=2/106$, $p<0.01$ ）。さらに、ライヤン法による平均対の比較を行った結果、「自分」>「両親」、「同性の友人」>

「両親」間に有意差（5%水準）が認められた。

表4-3-1 「共にいるとき心の落ち着く相手」の対象別の「反抗・内的混乱」尺度得点

		自分	両親 (父母)	同性の 友人
中学	N	40	38	35
	M	14.63	13.66	13.77
	SD	2.83	3.74	3.52
高校	N	46	17	46
	M	14.09	14.35	14.26
	SD	3.40	3.33	3.08
大学	N	53	19	37
	M	12.55	9.68	11.92
	SD	3.33	2.50	2.40

また、発達傾向では、「自分」「両親」「同性の友人」に主効果が認められた（「自分」： $F=5.26$, $df=2/136$, $p<0.01$ ；「両親」： $F=10.75$, $df=2/71$, $p<0.001$ ；「同性の友人」： $F=6.36$, $df=2/115$, $p<0.01$ ）。さらに、ライヤン法による平均対の比較を行った結果、「自分」では、中学生>大学生間に有意差（5%水準）が、高校生>大学生間に傾向が認められた。「両親」と「同性の友人」では、それぞれ、中学生>大学生、高校生>大学生間に有意差（5%水準）が認められた。

表4-3-2 「困ったとき意見を重んずる相手」の対象別の「反抗・内的混乱」尺度得点

		自分	両親 (父母)	同性の 友人
中学	N	31	40	34
	M	13.45	13.53	14.94
	SD	3.79	3.21	3.42
高校	N	40	33	39
	M	13.45	14.27	14.62
	SD	2.88	3.28	3.35
大学	N	48	32	29
	M	11.94	12.06	12.24
	SD	2.94	3.36	2.67

表4-3-3 「これからの人生で心の支えになる相手」の対象別の「反抗・内的混乱」尺度得点

		自分	両親 (父母)	同性の 友人
中学	N	33	43	24
	M	14.20	14.05	14.58
	SD	3.47	3.34	3.17
高校	N	24	39	39
	M	13.58	14.28	14.72
	SD	3.40	3.05	3.08
大学	N	38	22	43
	M	12.00	11.14	12.00
	SD	2.98	2.92	2.77

問2では、依存対象別で主効果は認められなかった。発達傾向では、「自分」「両親」「同性の友人」に主効果が認められた（「自分」： $F=3.18$, $df=2/116$, $p<0.05$ ；「両親」： $F=3.72$, $df=2/102$, $p<0.05$ ；「同性の友人」： $F=6.39$, $df=2/99$, $p<0.01$ ）。さらに、ライヤン法による平均対の比較を行った結果、「自分」と「両親」では、高校生>大学生間に傾向が認められ、「同性の友人」では、中学生>大学生、高校生>大学生間に有意差（5%水準）が認められた。

問3では、依存対象別で主効果は認められなかった。発達傾向では、「自分」「両親」「同性の友人」に主効果が認められた（「自分」： $F=4.14$, $df=2/92$, $p<0.05$ ；「両親」： $F=7.81$, $df=2/101$, $p<0.01$ ；「同性の友人」： $F=9.96$, $df=2/103$, $p<0.001$ ）。さらに、ライヤン法による平均対の比較を行った結果、「自分」では、中学生>大学生間に有意差（5%水準）が認められ、「両親」と「同性の友人」では、中学生>大学生、高校生>大学生間に有意差（1%水準）が認められた。

4. 考 察

本研究では、青年の依存対象への依存度や自分の相対的な位置づけが彼らの独立意識にどのような影響を与えているかについて、中学生・高校生・大学生を対象に検討を行った。考察では、まず、独立意識と依存性についての発達傾向などの実態を取りあげ、その後、独立意識と依存性との関わりについて扱うことにする。

4.1. 年齢別・性別の独立意識の測定尺度の得点の比較

表1の結果より、男子では、尺度Iの「独立性」の得点が、中学生、高校生、大学生になるに従い、増大しており、尺度IIの「親への依存性」の得点は、中学生から高校生にかけて減少している。また、尺度IIIの「反抗・内的混乱」の得点は、高校生から大学生にかけて減少している。このような特徴を、加藤ら（1980）⁽⁹⁾の結果と比較すると、いくつかの異なる点が認められており、一方では、発達に伴い、反抗・内的混乱の意識の減少などでは一致した結果も得られている。異なった点を整理すると、本研究の調査対象者は、加藤らの調査対象者に比べて、中学生では「独立性」の得点が低く、「親への依存性」の得点が高いこと、高校生では、「反抗・内的混乱」の得点が若干高いこと、大学生では、「独立性」の得点が高いことなどである。これらのことから、男子の独立意識は、まず、中学生の時期には中程度の独立性の水準に達しているが、親への依存度も高く、また、反抗・内的混乱の意識も比較的高く（加藤ら（1980）⁽⁹⁾は、中学生での「13.90」という得点について、「全般的に低い」と評価している。しかし、5件法の回答であるために、「どちらともいえない」という回答の多い段階の得点であると思われる。また、この尺度IIIの場合、その内容を考慮すると、むしろ、積極的に各項目を否定できないということは、青年の不安定な心情を反映していると考えられる）、心理的社会的に非常に不安定な状態にいるといえよう。高校生段階になると、意識上での独立性が高まるとともに、親への依存性が減少している。しかし、反抗・内的混乱の意識

は、依然として高く、環境の抵抗や自己内部の葛藤を主体的に克服できているとはいえない状態に
いるといえよう。このような状態は、親からの分離過程を5段階に分けて定式化している Bloom
(1980)⁽⁴⁾によると、「分離に関する認知の獲得」「分離に対する情緒的反応」の第2～第3段階に
相当すると思われる。すなわち、これらの段階では、青年は、考え方や感じ方が違う親と自分は別
の人間であることを自覚する体験を通して分離過程を促進させる一方で、親という依存対象の喪失
と「個」としての裸の自己に直面して感じる漠然とした自覚（孤独感・抑うつ感）を実感しており、
安定した対人関係の成立を切実に願いながらも十分に成立させえない状況にいたのである。ところが、
大学生段階では、より一層、意識上での独立性が高まる一方で、反抗・内的混乱の意識が急速
に落ち着きを示している。すなわち、この段階になると、ようやく、青年は、より広範な世界像や
価値体系の中から、自分の感覚に合うものがある程度、取り入れられつつあり、いわゆる、価値観
の取り入れと再統合を行った（あるいは、行いつつある）時の状態であるといえよう。

一方、女子では、尺度Ⅰの「独立性」の得点が、年齢の上昇に伴い、やや増大する傾向が認めら
れ、尺度Ⅲの「反抗・内的混乱」の得点は、男子と同様、高校生から大学生にかけて減少している。
しかし、尺度Ⅱの「親への依存性」の得点では、男子のような減少傾向は認められず、意識上では、
比較的高い依存性を持ち続けている。また、加藤ら（1980）⁽⁵⁾の結果と比較すると、男子と同様、
中学生では、「独立性」の得点が低いことと「親への依存性」が高いこと、高校生では、「反抗・内
的混乱」の得点が高いことが指摘できる。なお、大学生では、加藤らの結果とほぼ同様な結果が得
られている。これらのことから、女子の独立意識は、中学生段階では、中程度の独立性の水準、高
い親への依存性、反抗・内的混乱の意識があり、男子（中学生）と全く同じような状態にあると思
われる。高校生段階になっても、中学生と同じような状態が示唆されている。一方、大学生になる
と、独立性の意識も若干高まり、反抗・内的混乱の意識が低下することから、精神衛生的には健全
な傾向と思われるが、男子と異なり、親への依存性は高い状態にある。この点については、加藤ら
(1980)⁽⁵⁾や高橋（1968a⁽⁷⁾）の指摘にもあるように、女子青年における親への依存性は必ずし
も独立への障害にはならないことを示唆しているものと思われる。

4.2. 各対象への依存度・自己の独立性の意識

表2-1～表2-3、表3-1～表3-3の結果については、結果の章で詳細に検討を加えたの
で、ここでは、大まかな傾向を指摘してみたい。

まず、中学生、高校生、大学生となるに従い、「自分」の相対的順位が上昇しており、自己の独
立性の意識が明確化されてきていることが示されている。この結果は、想定されていたこととはい
え、中学生段階から自己の独立の意識がかなり発達していることが明らかにされた。

問1、問2、問3を通して、平均順位が上位にあるものは、「自分」「同性の友人」「母」「父」な
どであり、下位にあるものは、「神（仏）」「先生」「親類」などである。このことから、依存の対象
としては、主に家族と友人（特に同年輩）であり、血縁関係にある「親類」は、ほとんど心理的な
支えとしての役割を失っていることを示している。また、「神（仏）」は、ほとんど最下位であり、

宗教的な側面への無関心さを表わしている。このことは、従来、青年の同一性に関する研究の中で、日本青年の場合、宗教の領域がさほど重要でないことが指摘され、他の領域を設定して研究がなされていること（例えば、無藤，1979⁽⁵⁾など）からも示唆される。

4.3. 独立意識と依存性の関係

表4-1-1～表4-1-3の結果より、尺度Ⅰの「独立性」と依存対象別では、問2と問3の一部において、「自分」を選択したものが「両親」や「同性の友人」を選択したものよりも独立性の意識の高いことが示されている。ただし、大学生になると、そのような差異は認められていない。発達傾向では、問2の「自分」を選択したものの以外では、前述の独立意識の発達傾向と同様な結果が示されている。これらのことから、中学生や高校生の段階では、自分の意見や選択・判断を尊重しようとする傾向の強いものは、他の依存対象のそれを尊重するものよりも、独立性の意識の高いことが明らかにされた。また、新たな価値観の取り入れや再統合がなされた安定した状態であると前述した大学生段階では、依存対象のちがいによっては独立性の意識の水準に差がなく、高いのが特徴であり、前の指摘を支持するものである。

表4-2-1～表4-2-3の結果より、尺度Ⅱの「親への依存性」と依存対象別では、問1、問2、問3において、「両親」を選択したものが「自分」や「同性の友人」を選んだものよりも、親への依存性の意識の高いことが示されている。発達傾向では、問1で「同性の友人」を選択したものは、中学生、高校生、大学生となるに従い、依存性が低くなっており、問2と問3で「自分」を選択したものは、高校生において依存性が低くなっている。これらのことから、両親を依存対象にしていることと独立意識の尺度Ⅱとの間には密接な関係のあることが示されており、尺度Ⅱの「親への依存性」にさらにひとつの妥当性を与える結果となっている。また、高校生の段階で親への依存性が「自分」を選択したもので最も低くなっていることは、前述の独立意識の発達傾向でも指摘したように、親からの分離に伴う情緒的な反応であるところの孤独感や抑うつ感を強く感じながら、対人関係では十分に安定した関係をつくりあげることのできないでいる状態が明確に表われており、興味深い点である。

表4-3-1～表4-3-3の結果より、尺度Ⅲの「反抗・内的混乱」と依存対象別では、問1の大学生においてのみ、「両親」を選択したものが「自分」や「同性の友人」を選択したものよりも、反抗・内的混乱の意識の低いことが示されている。発達傾向では、問1、問2、問3とも、前述の独立意識の発達傾向と同様な結果が示されている。これらのことから、大学生における両親への依存性の特徴は、困った際の具体的な指示や今後の生き方の指針・時間的展望に関する内容を期待しているというより、心理的情緒的な安定感を与えてくれる存在として親を位置づけており、自己内部の葛藤などを主体的に克服する過程におけるよき理解者としてとらえているようである。すなわち、そのように位置づけることは、自ら主体的に問い直し選びとった価値観や世界像をもとに、親と子が別個の人間として受け入れ合いながら和解し、新たな親子の絆を再確認をするような段階にさしかかっていることを示唆していると思われる。

これまでの結果・考察から、4つの検討課題についてまとめると以下のようになる。

- 1) 依存対象として「自分」の順位が相対的に高い位置を占めている者は、独立意識の発達過程にある中学生・高校生では、独立性の意識が比較的高くなった。
- 2) 依存対象として「父」「母」の順位が相対的に高い位置を占めている者は、親への依存性の意識が比較的高くなった。また、大学生になると、反抗・内的混乱の意識が比較的低くなる場合もあることが認められた。
- 3) 依存対象として「(同性)の友人」の順位が相対的に高い位置を占めている者は、「自分」を依存対象としている者よりも、独立性の意識が相対的に低くなることもあり、「両親」を依存対象としている者よりも、親への依存性の意識が比較的低くなった。
- 4) 依存対象の相対的位置づけと青年の独立意識の関連においては、独立性の意識と困ったときの相談相手・人生での心の支えといった観点、反抗・内的混乱の意識と心の落ち着く相手といった観点というように、依存対象に求めている観点によるちがいによって、両者の関連性に差異が認められた。

5. 要約と結論

本研究は、依存対象への依存度・自分の相対的な位置づけが青年の独立意識に及ぼす効果について検討したものである。

主な結果は、以下の通りである。

青年期の独立意識の発達傾向は、男子で、独立性の意識の増大と親への依存性や反抗・内的混乱の意識の減少が認められた。女子では、独立性の意識の若干の増大と反抗・内的混乱の意識の減少が認められた。また、女子では、親への依存性の意識には変化が認められず、高い状態で推移することが明らかにされた。

依存対象としての「自分」の相対的順位は、年齢の上昇に伴い上昇することが認められた。依存対象としては、「同性の友人」「自分」「母」「父」などが上位にあり、家族や友人が青年の主要な心理的支えとしての役割を果たしていることが明らかにされた。

独立性の意識の高低は、中学生、高校生において、「困ったとき意見を重んずる相手」「これからの人生で心の支えになる相手」としての依存対象が「自分」の場合、「両親」や「同性の友人」の場合よりも高くなることが明らかにされた。

親への依存性の意識の高低は、どのような観点であっても依存対象が「両親」の場合、「自分」や「同性の友人」の場合よりも高くなることが明らかにされた。

反抗・内的混乱の意識の高低は、大学生において、「共にいるとき心の落ち着く相手」としての依存対象が「両親」の場合、「自分」や「同性の友人」の場合よりも低くなることが明らかにされた。

付記：資料の収集にあたり、各被験校の先生方、生徒・学生の皆様の御協力をいただきました。また迫千雪氏（現、鹿児島県林務水産部）には、資料の収集ならびにデータ入力などの過程において、御援助・御協力をいただきました。ここに感謝の意を表わします。

引用文献

- (1) Bloom, M. V. 1980 Adolescent parent separation. Gardner Press.
- (2) 加藤隆勝 1977 青年期における自己意識の構造（心理学モノグラフ, No.14), 東京大学出版会.
- (3) 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係, 教育心理学研究, 28(4), 336-340.
- (4) 久世敏雄 1958 心理的離乳, 依田新（編）家族の心理, 培風館, 70-89.
- (5) 無藤清子 1979 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性, 教育心理学研究, 27(3), 178-187.
- (6) 鈴木 清 1936 自我を中心とする児童の道徳に関する一研究（一）, 教育心理研究, 11, 676-695.
- (7) 高橋恵子 1968a 依存性の発達の研究：I — 大学生女子の依存性 —, 教育心理学研究, 16(1), 7-16.
- (8) 高橋恵子 1968b 依存性の発達の研究：II — 大学生との比較における高校生女子の依存性 —, 教育心理学研究, 16(4), 216-226.
- (9) 高橋恵子 1970 依存性の発達の研究：III — 大学・高校生との比較における中学生女子の依存性 —, 教育心理学研究, 18(2), 65-75.

〔資料1-1〕 独立意識の質問紙（質問項目）

(Ⅰ)「独立性」の尺度

(Ⅱ)「親への依存性」の尺度

(Ⅲ)「反抗・内的混乱」の尺度

- 1 自分の人生を自分で築いていく自信がある。(Ⅰ)
- 2 自分自身の判断に責任をもって行動することができる。(Ⅰ)
- 3 生きることの意味や価値を自分で見出すことができる。(Ⅰ)
- 4 生活の中に自分の個性を生かそうと努めている。(Ⅰ)
- 5 まわりの人と意見がちがっても、自分が正しいと思うことを主張できる。(Ⅰ)
- 6 小さなことでも、自分で決断することができない。(Ⅰ)ー
- 7 社会の中で自分の果すべき役割があると思う。(Ⅰ)
- 8 自分の考えが変わりやすく自信がもてない。(Ⅰ)ー
- 9 自分の本当にやりたいことが何なのかわからない。(Ⅰ)ー
- 10 たとえ学校の成績が悪くても、人間として、ひけめを感じることはない。(Ⅰ)
- 11 親といるだけで何となく安心できる。(Ⅱ)
- 12 困ったときは親に頼りたくなる。(Ⅱ)
- 13 親は自分の心の支えである。(Ⅱ)
- 14 何かするときには、親にはげましてもらいたい。(Ⅱ)
- 15 自分で決心できないときは、親の意見に従うようにしている。(Ⅱ)
- 16 両親を理解しようと思うのだが、つい反抗し、けんかになることが多い。(Ⅲ)
- 17 親や先生の言うことには、たとえ正しくても反対したくなる。(Ⅲ)
- 18 大人に対してひけめを感じるが多い。(Ⅲ)
- 19 両親に対して自分のことを打ち明けて話す気にはなれない。(Ⅲ)
- 20 親に対して自分の意見を主張したいが、自信をもてない。(Ⅲ)

〔資料2-1〕 各依存対象の順位別の人数と割合
 中学の「共にいるとき心の落ち着く相手」の割合

FREQUENCY PERCENT	自 分	父	母	きょう だい	親 類	先 生	同性の 友 人	異性の 友 人	上級生 先 輩	神 (仏)
1 位	40 31.75	14 11.11	25 19.84	4 3.20	0 0.00	1 0.79	35 27.78	2 1.59	1 0.79	4 3.20
2 位	12 9.45	32 25.20	38 29.92	8 6.30	2 1.57	1 0.79	21 16.54	1 0.79	4 3.15	8 6.30
3 位	10 7.94	12 9.52	31 24.60	36 28.57	5 3.97	4 3.17	17 13.49	1 0.79	4 3.17	6 4.76
4 位	15 11.90	25 19.84	8 6.35	21 16.67	14 11.11	5 3.97	21 16.67	8 6.35	4 3.17	5 3.97
5 位	10 8.00	14 11.20	12 9.60	25 20.00	20 16.00	4 3.20	14 11.20	11 8.80	7 5.60	8 6.40
6 位	12 9.52	10 7.94	3 2.38	7 5.56	31 24.60	13 10.32	10 7.94	17 13.49	12 9.52	11 8.73
7 位	5 3.97	6 4.76	4 3.17	7 5.56	21 16.67	27 21.43	4 3.17	15 11.90	22 17.46	15 11.90
8 位	9 7.14	1 0.79	3 2.38	3 2.38	16 12.70	26 20.63	2 1.59	21 16.67	25 19.84	20 15.87
9 位	10 8.13	3 2.44	1 0.81	2 1.63	12 9.76	21 17.07	1 0.81	21 17.07	31 25.20	21 17.07
10 位	3 2.73	3 2.73	0 0.00	3 2.73	4 3.64	24 21.82	1 0.91	29 26.36	16 14.55	27 24.55

〔資料2-2〕 高校の「共にいるとき心の落ち着く相手」の割合

FREQUENCY PERCENT	自 分	父	母	きょう だ い	親 類	先 生	同性の 友 人	異性の 友 人	上級生 先 輩	神 (仏)
1 位	46 37.70	2 1.64	16 13.11	6 4.92	0 0.00	0 0.00	46 37.70	4 3.28	0 0.00	2 1.64
2 位	16 13.33	9 7.50	30 25.00	15 12.50	0 0.00	0 0.00	32 26.67	8 6.67	7 5.83	3 2.50
3 位	17 14.05	20 16.53	24 19.83	24 19.83	0 0.00	2 1.65	10 8.26	11 9.10	8 6.61	5 4.13
4 位	8 6.56	26 21.31	13 10.66	33 27.05	5 4.10	4 3.28	17 13.93	9 7.38	5 4.10	2 1.64
5 位	14 11.57	22 18.18	21 17.36	16 13.22	10 8.26	4 3.31	10 8.26	9 7.44	9 7.44	6 4.96
6 位	5 4.13	14 11.57	9 7.44	9 7.44	27 22.31	9 7.44	4 3.31	11 9.10	27 22.31	6 4.96
7 位	9 7.69	11 9.40	2 1.71	5 4.27	20 17.09	23 19.66	2 1.71	14 11.97	24 20.51	7 5.98
8 位	2 1.87	5 4.67	2 1.87	2 1.87	25 23.36	29 27.10	0 0.00	14 13.08	17 15.89	11 10.28
9 位	2 2.06	2 2.06	4 4.12	1 1.03	24 24.74	26 26.80	0 0.00	9 9.28	12 12.37	17 17.53
10 位	2 2.70	5 6.76	0 0.00	2 2.70	5 6.76	20 27.03	0 0.00	5 6.76	2 2.70	33 44.59

〔資料2-3〕 大学の「共にいるとき心の落ち着く相手」の割合

FREQUENCY PERCENT	自 分	父	母	きょう だい	親 類	先 生	同性の 友 人	異性の 友 人	上級生 先 輩	神 (仏)
1 位	53 43.09	3 2.44	16 13.01	6 4.88	0 0.00	0 0.00	38 30.89	4 3.25	2 1.63	1 0.81
2 位	13 10.57	12 9.76	24 19.51	19 15.45	0 0.00	1 0.81	33 26.83	13 10.57	7 5.69	1 0.81
3 位	8 6.56	25 20.49	28 22.95	21 17.21	1 0.82	2 1.64	14 11.48	14 11.48	9 7.38	0 0.00
4 位	16 13.22	20 16.53	26 21.49	22 18.18	3 2.48	2 1.65	20 16.53	5 4.13	7 5.79	0 0.00
5 位	9 7.50	25 20.83	10 8.33	16 13.33	10 8.33	2 1.67	11 9.17	22 18.33	12 10.00	3 2.50
6 位	8 7.02	17 14.91	10 8.77	15 13.16	12 10.53	7 6.14	6 5.26	16 14.04	22 19.30	1 0.88
7 位	6 5.77	8 7.69	4 3.85	5 4.81	17 16.35	15 14.42	1 0.96	20 19.23	23 22.12	5 4.81
8 位	2 1.98	4 3.96	1 0.99	0 0.00	35 34.65	32 31.68	0 0.00	7 6.93	18 17.82	2 1.98
9 位	5 5.32	1 1.06	0 0.00	3 3.19	21 22.34	35 37.23	0 0.00	6 6.38	6 6.38	17 18.09
10 位	1 1.35	0 0.00	1 1.35	1 1.35	4 5.41	6 8.11	0 0.00	1 1.35	3 4.05	57 77.03

〔資料2-4〕 中学の「困ったとき意見を重んずる相手」の割合

FREQUENCY PERCENT	自 分	父	母	きょう だ い	親 類	先 生	同性の 友 人	異性の 友 人	上級生 先 輩	神 (仏)
1 位	32 25.20	22 17.32	19 14.96	4 3.15	0 0.00	4 3.15	34 26.77	0 0.00	3 2.36	9 7.09
2 位	9 7.20	24 19.20	39 31.20	5 4.00	2 1.60	7 5.60	22 17.60	5 4.00	3 2.40	9 7.20
3 位	12 9.60	20 16.00	30 24.00	20 16.00	4 3.20	11 8.80	18 14.40	6 4.80	3 2.40	1 0.80
4 位	11 8.73	22 17.46	14 11.11	17 13.49	14 11.11	15 11.90	18 14.29	4 3.17	8 6.35	3 2.38
5 位	8 6.40	7 5.60	7 5.60	31 24.80	14 11.20	14 11.20	11 8.80	11 8.80	17 13.60	5 4.00
6 位	12 9.52	9 7.14	8 6.35	13 10.32	22 17.46	16 12.70	4 3.17	12 9.52	18 14.29	12 9.52
7 位	9 7.03	8 6.25	2 1.56	10 7.81	22 17.19	16 12.50	16 12.50	12 9.38	14 10.94	19 14.84
8 位	10 8.00	1 0.80	5 4.00	8 6.40	18 14.40	18 14.40	1 0.80	25 20.00	22 17.60	17 13.60
9 位	11 8.87	3 2.42	1 0.81	4 3.23	24 19.35	13 10.48	1 0.81	22 17.74	24 19.35	21 16.94
10 位	12 10.91	4 3.64	0 0.00	4 3.64	5 4.55	12 10.91	1 0.91	29 26.36	14 12.73	29 26.36

〔資料2-5〕 高校の「困ったとき意見を重んずる相手」の割合

FREQUENCY PERCENT	自 分	父	母	きょう だ い	親 類	先 生	同性の 友 人	異性の 友 人	上級生 先 輩	神 (仏)
1 位 33.33	41 33.33	12 9.76	22 17.89	1 0.81	0 0.00	2 1.63	39 31.71	1 0.81	2 1.63	3 2.44
2 位 7.56	9 7.56	27 22.69	22 18.49	4 3.36	0 0.00	6 5.04	30 25.21	9 7.56	8 6.72	4 3.36
3 位 18.03	22 18.03	14 11.48	29 23.77	15 12.30	0 0.00	9 7.38	19 15.57	4 3.28	8 6.56	2 1.64
4 位 9.09	11 9.09	16 13.22	16 13.22	25 20.66	2 1.65	15 12.40	8 6.61	13 10.74	9 7.44	6 4.96
5 位 7.44	9 7.44	18 14.88	14 11.57	19 15.70	6 4.96	11 9.09	13 10.74	10 8.26	17 14.05	4 3.31
6 位 3.33	4 3.33	9 7.50	11 9.17	16 13.33	16 13.33	26 21.67	3 2.50	10 8.30	23 19.17	2 1.67
7 位 6.78	8 6.78	10 8.47	5 4.24	14 11.86	22 18.64	13 11.02	7 5.93	15 12.71	17 14.41	7 5.93
8 位 5.66	6 5.66	5 4.72	0 0.00	8 7.55	29 27.36	12 11.32	2 1.89	14 13.21	16 15.09	14 13.21
9 位 4.26	4 4.26	4 4.26	2 2.13	7 7.45	24 25.53	17 18.09	0 0.00	14 14.89	6 6.38	16 17.02
10 位 4.17	3 4.17	1 1.39	0 0.00	3 4.17	18 25.00	7 9.72	0 0.00	3 4.17	3 4.17	34 47.22

〔資料2-6〕 大学の「困ったとき意見を重んずる相手」の割合

FREQUENCY PERCENT	自 分	父	母	きょう だい	親 類	先 生	同性の 友 人	異性の 友 人	上級生 先 輩	神 (仏)
1 位	48 39.02	17 13.82	15 12.20	4 3.25	0 0.00	3 2.44	30 24.39	3 2.44	3 2.44	0 0.00
2 位	13 10.48	26 20.97	27 21.77	9 7.26	0 0.00	4 3.23	27 21.77	5 4.03	11 8.87	2 1.61
3 位	16 13.11	22 18.03	28 22.95	11 9.02	1 0.82	9 7.38	9 7.38	9 7.38	17 13.93	0 0.00
4 位	8 6.56	19 15.57	9 7.38	19 15.57	3 2.46	10 8.20	29 23.77	13 10.66	11 9.02	1 0.82
5 位	10 8.40	13 10.92	21 17.65	13 10.92	4 3.36	14 11.76	14 11.76	14 11.76	16 13.45	0 0.00
6 位	8 7.55	11 10.38	9 8.49	12 11.32	5 4.72	22 20.75	9 8.49	12 11.32	17 16.04	1 0.94
7 位	2 2.00	4 4.00	7 7.00	9 9.00	19 19.00	19 19.00	2 2.00	19 19.00	14 14.00	5 5.00
8 位	6 6.19	3 3.09	4 4.12	16 16.49	21 21.65	15 15.46	2 2.06	14 14.43	12 12.37	4 4.12
9 位	5 5.56	2 2.22	1 1.11	10 11.11	39 43.33	10 11.11	0 0.00	7 7.78	5 5.56	11 12.22
10 位	1 1.39	0 0.00	1 1.39	1 1.39	6 8.33	0 0.00	0 0.00	1 1.39	2 2.78	60 83.33

〔資料2-7〕 中学の「これからの人生で心の支えになる相手」の割合

FREQUENCY PERCENT	自 分	父	母	きょう だい	親 類	先 生	同性の 友 人	異性の 友 人	上級生 先 輩	神 (仏)
1 位	33 26.40	24 19.20	19 15.20	4 3.20	2 1.60	1 0.80	25 20.00	9 7.20	1 0.80	7 5.60
2 位	12 9.60	26 20.80	46 36.80	4 3.20	2 1.60	1 0.80	18 14.40	7 5.60	3 2.40	6 4.80
3 位	9 7.09	22 17.32	26 20.47	29 22.83	4 3.15	9 7.09	17 13.39	2 1.57	3 2.36	6 4.72
4 位	14 11.02	16 12.60	12 9.45	29 22.83	9 7.09	4 3.15	23 18.11	4 3.15	7 5.51	9 7.09
5 位	7 5.56	14 11.11	12 9.52	16 12.70	22 17.46	8 6.35	19 15.08	9 7.14	9 7.14	10 7.94
6 位	10 7.94	6 4.76	2 1.59	11 8.73	22 17.46	19 15.08	9 7.14	21 16.67	15 11.90	11 8.73
7 位	10 8.06	3 2.42	1 0.81	12 9.68	17 13.71	15 12.10	12 9.68	17 13.71	13 10.48	24 19.35
8 位	10 8.00	3 2.40	1 0.80	5 4.00	22 17.60	24 19.20	2 1.60	17 13.60	27 21.60	14 11.20
9 位	13 10.00	3 2.31	5 3.85	2 1.54	21 16.15	23 17.69	1 0.77	14 10.77	34 26.15	14 10.77
10 位	6 5.71	3 2.86	1 0.95	4 3.81	4 3.81	22 20.95	0 0.00	26 24.76	14 13.33	25 23.81

〔資料2-8〕 高校の「これからの人生で心の支えになる相手」の割合

FREQUENCY PERCENT	自 分	父	母	きょう だい	親 類	先 生	同性の 友 人	異性の 友 人	上級生 先 輩	神 (仏)
1 位 22.94	25 9.17	10 27.52	30 1.83	2 0.00	0 0.00	0 22.94	25 11.93	13 0.92	1 2.75	3
2 位 11.97	14 23.93	28 16.24	19 10.26	12 0.00	0 1.71	2 15.38	18 15.38	18 0.85	1 4.27	5
3 位 8.33	10 16.67	20 24.17	29 12.50	15 0.83	1 0.83	1 14.17	17 9.17	11 6.67	8 6.67	8
4 位 9.38	12 14.84	19 12.50	16 25.00	32 0.78	1 1.56	2 17.99	23 6.25	8 8.59	11 3.13	4
5 位 12.70	16 11.11	14 11.11	14 15.87	20 9.52	12 7.14	9 15.08	19 7.14	9 8.73	11 1.59	2
6 位 3.39	4 11.86	14 7.63	9 11.02	13 15.25	18 19.49	23 5.08	6 10.17	12 12.71	15 3.39	4
7 位 8.47	10 2.54	3 1.69	2 8.47	10 23.73	28 12.71	15 2.54	3 5.93	7 26.27	31 7.63	9
8 位 8.33	9 3.70	4 0.93	1 2.78	3 18.52	20 21.30	23 3.70	4 11.11	12 18.52	20 11.11	12
9 位 7.14	7 4.08	4 0.00	0 2.04	2 22.45	22 28.57	28 1.02	1 5.10	5 9.18	9 20.41	20
10 位 8.64	7 1.23	1 1.23	1 3.70	3 17.28	14 17.28	14 1.23	1 2.47	2 4.94	4 41.98	34

〔資料2-9〕 大学の「これからの人生で心の支えになる相手」の割合

FREQUENCY PERCENT	自 分	父	母	きょう だ い	親 類	先 生	同性の 友 人	異性の 友 人	上級生 先 輩	神 (仏)
1 位 38 30.65	6 4.84	16 12.90	4 3.23	0 0.00	1 0.81	44 35.48	12 9.68	2 1.61	1 0.81	
2 位 9 7.38	25 20.49	25 20.49	8 6.56	1 0.82	4 3.28	23 18.85	22 18.03	4 3.28	1 0.82	
3 位 9 7.26	33 26.61	29 23.39	20 16.13	1 0.81	2 1.61	6 4.84	10 8.06	14 11.29	0 0.00	
4 位 13 11.11	19 16.24	20 17.09	22 18.80	2 1.71	5 4.27	16 13.68	12 10.26	7 5.98	1 0.85	
5 位 7 6.14	13 11.40	19 16.67	14 12.20	3 2.63	11 9.65	21 18.42	14 12.28	10 8.77	2 1.75	
6 位 9 8.74	12 11.65	3 2.91	10 9.71	12 11.65	15 14.56	4 3.88	18 17.48	18 17.48	2 1.94	
7 位 7 6.93	6 5.94	3 2.97	17 16.83	13 12.87	19 18.81	2 1.98	9 8.91	19 18.81	6 5.94	
8 位 4 4.17	2 2.08	4 4.17	7 7.29	30 31.25	26 27.08	3 3.13	2 2.08	15 15.63	3 3.13	
9 位 10 11.11	1 1.11	1 1.11	4 4.44	28 31.11	18 20.00	0 0.00	4 4.44	8 8.89	16 17.78	
10 位 1 1.39	0 0.00	1 1.39	0 0.00	8 11.11	1 1.39	0 0.00	1 1.39	4 5.56	56 77.78	